
堪忍袋の緒が切れた

狛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

堪忍袋の緒が切れた

【Nコード】

N1442X

【作者名】

狛

【あらすじ】

まさに王道としか言えない無駄に豪華な学園。

幼稚園から大学までのエスカレーター式のその学園にはまあ……ゲイの方が溢れてしまっているわけで。

親の勝手な命令で主人公はそこへ入学することになるが。

何故かいきなり親衛隊隊長を任命され、皆から嫌われてしまい。

とうとう、キレます。

かもしれない、あくまで予定です。

初のBLです。

キスはしてもそれ以上の描写は入れません。

主人公はノンケです。

かなり非王道……かな？

甘甘？ナニそれおいしいの？ってぐらい甘くない！です。

以上の事柄がダメな方はバックをお勧めします。

刮目せよ（前書き）

ドキ ワク な学園ライフ始まるよ！

刮目せよ

朝、八時ジャスト。

カツカツと響く靴の音に、周りにいる生徒は一気に静かになる。

今か今かと熱い眼差しを閉ざされた扉に送っている。くだらねえ。

何時もならちゃんと着ける耳栓も今日はしない。

俺はネクタイを緩め、肩を鳴らす。

——この時を待っていた。

ずっと、ずっと……

今更になって拳が震える。何だ、緊張してんのか。

渴いた唇を舌で舐め、何とかして落ち着かせる。

告白する前ってこんな心情なのか、なんて考えたり。

靴の音が近付く。

誰かが息を飲む。

取っ手が回され、扉が開かれた。

「「キャアアアア!」」

やたら鼻に掛けた声で叫ぶ生徒、総勢百人。

「お早うございます、御厨会長!」

「今日もかつこいいです!」

茶番だ。くだらない茶番劇。

熱い眼差しを受けて顔をしかめる生徒会役員。

おまえらがそんな顔をするのはお門違いさ。

そんな嫌そうにしていたって、裏では――

俺は一步踏み出す。

つまり生徒会の進路を塞いだ。

嬌声が止み、代わりにざわめきが起こる。

かなりの視線が俺に集まるが気にしない。

今日こそ、この“日常”に終止符を打ってやる。

俺は怪訝な顔の生徒会プラスαに向かって言った。

「むむむ」

刮目せよ（後書き）

はい。初っ端からやりました。

腐女子、腐男子の方に喧嘩売りました。

ごめんなさい！！

こんなんでも読めるよ！な優しい方は次へお進みください。

あ、良ければ感想もお待ちします。

まだ始めだけど（笑）

まずは冷静に対処しよう（前書き）

全ての元凶は中三になったばかりの時……

まずは冷静に対処しよう

俺の親はそこそ有名な映画監督だ。

夫婦二人で打ち出した映画は日本の中で、特に二十代から四十代の年齢層にヒットしてきた。

ジャンルは様々で、サスペンスだったり時代劇だったり。

日本ではあまり多くないアクション映画も、実際に爆発などを起こして撮るといふ、かの有名な監督並に危険と無茶を侵して作り上げた。

勿論これも大ヒット。

ホラーはとことんリアルを追求して制作期間中に心霊スポットを回りまくり、かつてない程の恐怖を全国に震撼させた。

確かこれは十八禁になってたかな。

そんな無茶苦茶な親だけど俺は嫌いじゃなかった。

映画監督なんて夢を実現させる仕事だろ？

かつこいいじゃないか。

だけどさ、流石にこれはないんじゃない？

「てことで紺、あんたの高校は此处で決まりだから」

リビングのテーブルにでかでかと広げられたパンフレット。

青々と繁る森の中に佇むバロック式の宮殿もとい校舎。

「全寮制で、しかも特待生で入れれば全額免除！　素晴らしい？」

「え、いや、素晴らしいと思うけどさ……何でこうなったかも一度説明くれる？」

「だから、」

親父が横から入ってきた。

「お父さんとお母さんで海外進出してくるから、しばらくお前一人になるわけ。此处までいいか？」

「お、おう……取り合えずオーケー」

「でだな、お前に一人暮らしはまだ早い。此处にぶち込めばこちらの手が掛からなくて済むと考えた訳だ」

んー？ 今若干というかバリバリ聞き捨てならない言葉が聞こえたんですが。

何、仕送りもしないつもりかこいつら。

親父と母さんはにこやかに笑った。

「パンフレット見た限りだとかかなり良い所じゃないか。そこに入れるよう勉強に励めよ」

「あ、そうそう。その生徒さんて皆一流企業の御子息なんですって。今のうちに仲良くなつとけば色々と都合が良いかもね！」

色々って何だよ、普通に笑って黒いこと言ってるじゃねえよ。

ていうかそんな堅苦しい所に行きたくない。

一流企業の御子息とか、俺のイメージだと七三で眼鏡掛けてて他人行儀で敬語で廊下を直角に曲がるようなのしかない。

俺は現在中学三年に成り立てはやはやだけど、少しやんちゃしてきたから絶対に気は合わないと思う。

それに高校に行ったら普通に可愛い彼女を作りたいし……って、あれ？

「此処って、男子校!？」

皆御子息ってことはそうだよな!？

うわ、絶対嫌だ!

「いいじゃない、住めば都よあ? それにあんたに拒否権は与えません」

「ふっざけんなクソババア!!
俺はぜってえ行かねえぞ!!」

怒りに任せてパンフレットを床に叩き付ける。次の瞬間、俺の頬に拳が入った。

そのまま床に投げ飛ばされる。

誰につて?

「誰がババアじゃボケエ……」

勿論、家のクソババアにだ。

「まだバリバリ現役っちゅうに、餓鬼が意気がつとんじゃねえべ!

！ 此処行け言つとるんやから大人しゅう行け！」

色んな方言を乱射する母さんの顔はまるで鬼婆だ。

いや怖くねえよ？ 怖くねえし少しもチビってねえからな？

俺は黙ったまま頷いた。

表向き諦めたと見せ掛けた俺は、さりげない抵抗を何度も試みた。

わざと成績を落したり、素行を悪くしたり。

だがそれだと余りにも母さんからの鉄拳が下るので、情けないことながら途中で諦めた。

もう一つ取った行動、逆に成績をかなり上げること。

そのエリート学校よりも高い偏差値の高校を狙えば、親も目移りするのではと考えたわけだ。

しかしながら、俺は重要な事を見過ごしていた。

そこよりも高い学校は全部女子校だった。

結果、「あなた、女の子になりたいの？」って真顔で聞かれ、敢え無く撃沈。

色んな意味でへこんだ。

そして最終手段、『願書を出し忘れちゃった、てへぺろ』作戦に移行したが、どうでもいいところでちゃっかりしている家の親が代わりに出しておいたとさ。

俺終わった。

もう何をやっても無駄、そう悟った。だったらもう、いつそのこと特待生を狙うか。

親は何としても行かせるつもりのようなだし、悪あがきも効かない。どうせ通うなら楽な学園生活を送りたい。

そくだ、何も敷地から出ちゃいけない事ではないのだ。必要とあらば買物に出れる筈。

それに便乗して外に彼女を作ればいい。何だったら、中学の友達に可愛い女の子を紹介してもらえればいい話だ。

そう割り切って、というかほぼ無理矢理こじつけて入試に挑んだ。病み期が通り過ぎて一周して、何故かハイテンションになった俺は、当日類い稀なる絶好調だった。

「落ち着け俺……戦いはこれからだぞ」

馬鹿でかい門の前で精神を統一する。

今日が入学式なのだが、駅から乗ってきたバスには俺以外誰も乗っ

ていなかった。

焦り。それに不安。

二度目になるこの門も、今日は何故か威圧的に見える。

ちなみに親父達は先週に日本を発った。

昨日来たメールにはカジノの写真が添付されており、

「ベガスFooooo!!」
と一言。

なにこれ虐めですか。

すぐに削除して着信拒否に設定させてもらいました。様見ろ。

——と、門を潜り体育館へ続く無駄に長い道を歩いていれば携帯が鳴る。

件名を見れば知らないアドレス。

本文はこのようだった。

「なんで着拒してんの」

分かりやすい、実に簡潔な一文。ありがとうございます。

俺は即座にそのアドレスも着信拒否に設定し、ついでに自分のアドレスも変えた。

よし、これならもう恐れることはないぞ！

嬉しさに頬が緩む、足取りも軽くなる。

左手に古めかしい校舎が見えてきた。

俺の頭の中に入れた地図によると、確かこれは旧校舎。此处を過ぎて道なりに歩いていけば、入学式を行う講堂がある筈。

此处まで来ればあとはそんなに遠くない。きっと生徒もちらほら見え始めるだろう。

そう、俺は今一人なんだ。

旧校舎の出入口付近にカラフルな頭が見えている気がするが、あれは野菜、野菜畑だ。なんなら果物畑でもいい。決して不良とかヤンキー等という不逞な輩ではあるまい。というか人間ではないだろう。大丈夫、今の俺は黒髪に伊達眼鏡の真面目ルック。目を付けられるわけがない、ないのだよ。だからこっち来るなあああ！！

「何だこいつ、見たことねえ顔だな」

金髪に話し掛けられた。

どうする？

一、蹴る。

二、潰す。

ちなみに目的語は金の付く玉です。

「足が滑ったごめん」

そう一言断りを入れて股間を蹴り上げた。

先手必勝、先に手を出したもん勝ちだ。

同性として急所を狙うのは少し躊躇われたけど仕方ない。ドンマイ。

「ぬうおおお!!」

「よっちゃん!!」

よっちゃんが鶏の首を絞めたような声を出しながら地面に倒れる。

自分でやっておきながら「痛そうだな……」と思って見てたら、完璧に逃げ遅れた。

「てめえ……ふざけんじゃねえぞ!!」

青髪と赤髪、それに緑髪に囲まれる。

ちょ、顔が近いんだけども。

「あゝあゝ！？」とか「ゴラァ！！」とか威嚇する度、顔に唾が飛ぶ。まじで勘弁。

それよりも、先に手を出したとはいえ、この状況はどうしたものか。

はつきり言つと結構危機的状況だったりする。

確かに中学の時は少しはつちやけていたが、それも校舎内での話だし喧嘩は数える程しかしたことない。それも片手で足りる程度。

それなのに、「喧嘩？ ああ、日課ですけど何か」な人々に囲まれるなんて、自分の事ながら阿呆だな。

もう一度、必殺金蹴りをしようにも、両腕をがっちりホールドされて無理。んー……これが女子だったら嬉しいんだけどな。

そのままズルズル引きずられるようにして校舎の中まで連れて行かれる。

これはちょっとまずいかな。

「落ち着け、平和に話し合おう」

なかなか良い提案だと思うのに、カラフルな頭の方々は聞いてくれない。

ちょ、このままじゃ本当にフルボッコにされる。

「ほら、飴あげるから畜生。ちょっと食べてみたくて買った納豆飴、フローラルな香りが口一杯に広がる納豆飴、レアモノだぞ欲しいだろ？ 遠慮するな、それでも食って引き籠っていてくれよ頼むから」

俺にとって最大限の譲歩。ぶっちゃけると凄くまずかったからなくしたいだけなんだけど。

「舐めてんじゃねえぞ！！」

よっちゃんがキレた。

いや、俺が金蹴りした時点で既にキレていたけど、火に油を注いでしたよっだ。

両腕を押さえ付けられて身動きが出来ないのにも関わらず、よっちゃんが大きく振りかぶる。

や、やばい。流石にやばいよ。優等生ルックで顔面腫れさせたら、優等生ではなく虐められっ子になっちまう。

そんな事になったら今後の体裁が悪いわけで。ていうか転校生いびるなよ。

「チエストおおお!!」

俺は隣で腕を抑えている赤髪君に頭突きを食らわす。

チエストと叫びながら頭を狙うのがポイント。

不意打ちに腕を掴む力が緩む。その瞬間を見逃すわけもなく、もう片腕を掴む青髪君の腹に蹴りを入れて逃げる。

よっちゃんと緑髪君は啞然としてたが、すぐに追い掛けてきた。

やだね、まったく。とにかく外に出ないと。いや、一旦隠れるか。

そうしないと永遠に追い掛けてきそうな気がする。

すぐ近くにあった教室の扉を開けた。

.....

あれ、おかしいな。俺はさながらアリスのように不思議の国へ迷い込んでしまったのか。いや、そんな訳ないか。

「んッ、んあッ」

誰も居ないと思っていた筈の教室には先客がいた。二人ほど。

中がやけにポカポカしているのは日光のせいにするとして、何でこの二人はセックスしているんだ。

此処、学校だぞ。何だ、補導でもされたいのか。

「……誰だ」

黒髪の、恐らく生徒が情事を続けながら鋭く睨む。

え、そこ止めないのかよ。なんつうアイアンハート。恥じらいがないところが漢らしいよ。

「こら待ちやがれ！　って、そこは――」

まずい、追いついてきた。

素早く中へ入り鍵を閉める。よし、この空間に居るのはかなり気まずいけどいいや。

「――ッ、ふ……んんッ、だ、誰……？」

「ん？　ああ、すまねえ。すぐに出て行くからお気になさらず……いや、出来たら止めて欲しいけどね」

こそこそと窓へ寄る。こんな所、早く出たい。誰とも知らない男女のセックスなんて目に毒だ。

.....

あれ。

あれれ。

此処って男子校じゃなかったか？

あれ、でもセックス……

思い切って振り返る。俺の事なんかまるで見えないかのように続けられている情事。黒髪男の下に亜麻色の髪の一――

「男!!?」

ま、待て落ち着け俺！

あれはきつと髪がやたらと短い女の子、そうに違いない。

実はあの二人は中学の時から付き合っていたのだが、ある日突然、男が姿を消した。女の子は必死になって捜すが見付からない。その男、本当は彼女に言えない深い事情があつて（暴走族の族長で彼女が敵から狙われないように、とか）この学園に身を潜めていたのだが、彼女がその噂を耳にした為、変装し入学することに。そして感動の再開を果たした二人はそのままセックスへ……

完、壁。

よし、この路線でいこう。あれは女の子であって、決して男ではないぞ。だいたい男同士で性交なんて無理だろ。

「瑚太、余所見してんじゃねえよ」

「んっツ、は、激し……ッ」

バリバリ男の名前じゃねえかよ！

嬌声が耳に張り付く。誰か嘘だって言うてくれ……

無性に腹がムカムカする。気持ち悪い、吐きそ——

「うっ、オ、ええええ」

「え、うわっ何！？」

「きたねえ……てめえ何吐いてんだコラ」

不覚。吐いちまった畜生。

「うっ、うるせえ！ ヤロー二人がこんな所でやってんじゃねえよ！

ていうかセックスって、セックスって……！！　うわああああ！！」

窓を開けて外に飛び出す。走りながらつい先程着信拒否した番号に電話を掛ける。

「――何」

「母さああん！！　セックスって男と女のアレだよね！？　断じて男同士でやるものではないよねえ！？」

「何言ってるの、同性愛だってあるに決まってるじゃないの」

「いや、そうだけど！

俺もうやだ！！　此処ホモがいるよ、ヤンキーもいるし！

超エリート学校じゃなかったのかよ！

こんな所に通えるかってんだ！

転校するぞ！！」

「……紺」

「何だよ！！」

「ホモは差別用語です」

ガチャン、と電話を切る音。ふざけんな、まだ文句言い足りねえよ！

着信履歴から再度掛け直す。だが耳に聞こえてきたのは無機質な機械の声だった。

着拒された。

有名無実とはこのこと

「——でありまして、本校では……」

式では恒例の、まさにお昼寝タイムが妥当な最高責任者の挨拶。

この学園だと理事長と校長の話を聞かなくてはならない。まさにダブルリアット。

先程理事長が話し終え、今は頭が寒そうな校長が無駄に長く話している。

しかしこうして改めて見ると、何やらこの学園はホモくさい。いやに若い理事長が出てきた時は、周りが動物園並の騒がしさだった。

確かに理事長は、学校の長らしからぬ派手さと容貌を持っていたが、俺としては別段に嬉しい事でも何でもない。欲を言うなら巨乳の超絶美人だったら良かったのにと思っている。

まあ、男子校の時点でも有り得ない話だ。

「——えー、そして何より本校では……」

長い。同じ事を何回も言うなよ。大切だから言うならともかく、後

の三年間で必要のない事……明日にでも忘れそうな事なんて繰り返すな。長ければ良いという問題ではないんだぞ。

そろそろパイプ椅子のせいで尻が痛くなってきた。

もぞもぞと座る位置を変えながら周りを見渡してみる。

殆どが舟を漕いでいる状態。いいな、羨ましい。俺も是非とも夢の世界へフライアウェイしたいところだが、この後生徒会長の挨拶が終わったら新入生挨拶をしなければならない。首席だからとか、本当にくだらない理由で。

「次に生徒会会長の挨拶」

何時の間にか校長は壇上から下りていた。

司会の声に、今までうたた寝していた奴等の背筋がぴんと伸びる。やけに顔を輝かせて……何だこいつら、怖いんだけど。

「在校生、そして新入生の皆さん」

声が響いた。テノールの声。

——きゃあああああああ——

続く悲鳴。あちこちで「素敵！」やら「かつこいい！」やら「抱け！」やらの声上がる。喧しいわ。

「うつせえぞー！」

キーン、とマイクが高音を奏でる。どすの利いた声にヤンキーを思わせる荒い言葉は、確かに今壇上にいる生徒会長の声で。

「この俺が話す時は騒ぐんじゃねえぞ。いいな！？」

鶴の一声とはこの事。一気に静まり返った講堂内を見渡して、生徒会長は不敵に笑った。俺の隣から溜め息にも似た声が漏れる。ちらっと顔を見たが、見事に赤面していた。まじでやめてくれよ。

「俺から言いたい事は三つ。まずはご入学、ご進学おめでとう。充実した学園生活を送ってくれ。続いて二つ目、此処では俺がルールだ。恐喝、喧嘩、強姦は断じて赦さない。最悪の場合退学は免れないと思え。そして最後、『百舌^{モス}』を知る者は情報提供を求む。以上だ。せいぜい楽しめ」

ブツ、とマイクが切られ、生徒会長は壇上から下りていく。

……え、ナニ今の。最初の方は良かったが、最後のなんか思い切り

私情だよな。ていうか偉そうな奴だ。こんなのが高等部の代表とか大丈夫なのか？

だいたい鳥を探したいならバードウォッチングでもしてこいよ。人に頼るなよ。頼るなら頼み方というものがあるだろう。

本当に、この学園はカオスだ。

「次に新入生挨拶。新入生代表、かんざき こん神崎紺」

俺の名前が呼ばれたので壇上上がる。俺が返事した瞬間、お隣りさんが凄く驚いていた。まさに予想外、といった感じだ。

今は優等生ルックなのに、何故そんなに驚くのか疑問に思ったが、すぐに納得した。

俺は目付きが悪い。それはもう、喧嘩売っていると間違えられるほど。それに加え垂れ目なものだから救いようがない。

恐らく、今のルックスにこの目付きというか顔がマッチしてなさ過ぎたのだろう。それはそれで結構落ち込むな。

総勢千人の前での挨拶。俺はそこまでアイアンハートではないので軽く緊張する。

そして別に期待はしていなかったが、この学園では俺はフツメンに位置するみたいだ。理事長や生徒会長のように騒がれない。あ、言っておくが騒いで欲しかった訳ではないからな。ただ、俺みたいな外部生が首席だと知ったらどんな反応をするのか見たかったただけだ。

案の定、俺を前にひそひそと話す声が聞こえてくる。

……俺、この学校あまり好きになれないかも。

乾いた唇を濡らしつつ、即席で考えた言葉を繋げて声に出す。

「誰、あれ」

「さあ……外部生じゃねえの？」

「なんだ、もったかつこいい人を期待してたのに」

「なんつつか、普通だ。残念」

ひそひそ、ひそひそと。何で人が話しているのに黙れないかな。嫌々ながら話してる俺の身にもなれってんだ。

ていうか一つ言わせてもらうが、中学の時はそれなりに人気はあったんだ。バレンタインの日には義理だけど最低五個は貰ってたんだぞ。確かに超イケメンではないにしろ、まだ一度も関わった事もない癖に普通それ言うか？

「——以上、新人生代表、神崎紺」

苛々する。

こんな学校、来るんじゃないかった。

乱暴にマイクを切った後、下りようとした俺に司会から制止の声が掛かった。

「ここで親衛隊総隊長からお知らせがあります。」

親衛隊……？ 何だそれ。生徒会以外にも組織があるのだろうか。ていうか何で壇上に居なければいけないんだ？ 俺に関わる事なのか？

生徒で埋め尽くされたそこで、一つの頭が動く。あれが『総隊長』という奴か。

早く用件言って終わらせるよ、と余裕こいていた俺は、そいつの顔を確認した瞬間絶句した。

亜麻色の、ワックスでセットされたふわふわの髪。琥珀色の目。少し彫りの深い顔立ち。

旧校舎でナニかしてた二人のうち下の方だ。

「ハロー、さっきぶり」

「さっきぶりじゃねえよ、こっちは顔も見たくねえんだよ」

「あはは、やっぱり面白いや」

こいつ……色んな意味で性格悪そうだ。面白い事を求めて何でもしてしまふタイプだぞきつと。

玩具を見付けた子供さながらの目で見られ、言いようもなく全身に鳥肌が立つ。

そいつはにんまりと笑い、マイクに向かって言った。

「全校生徒の諸君、おはよう！ 朗報があるよ。なんと、新・親衛隊総隊長が決まりましたあ！」

その言葉に、一斉に騒がしくなる。

だから何なの、親衛隊総隊長って。

「彼は僕の後輩で、バリタチに見えるけど本当はネコだから、間違えないであげてな！」

それと彼は物凄い男食いの淫乱ちゃんだから、皆も気を付けろよ？」

茶目っ気たっぷりな仕種を加え、全校生徒が次に紡ぎ出される言葉に神経を集中させる。

一部理解不可能な単語があったが、それにしても酷い言いようだ。
旧校舎で朝から放送禁止用語をしていた奴に言われるとは、そいつも不敏だ。

そして俺関係なくね？

「新・親衛隊総隊長は……」

しんと静かになった講堂の中で、その声はよく響いた。

「神崎紺に、任命します！」

……

「はああああああ！！？」

俺を含めた九百九十九人の雄叫びが合致した。

え、何なのマジで。虐めですか畜生。

「何で俺なんだよ！　つうか総隊長なんて知らねえし、外部生にやらせるなし！」

「やだなあ、さっきはあんなにやりたいって目を輝かせてたのに照れちゃってさ」

「何時、何処で、誰が言ったよ。勝手に話作ってんじゃねえ糞チビ」

「あはは、やっぱり紺ちゃんは面白いな。だけど残念、これは決定事項だから取り消し効かないよ」

嘲けるように笑う。うん、これ以上はないほどむかつく。取り敢えず殴りたい。激しく殴りたい。

「総隊長！　何故こんなぼつと出の奴に総隊長の座を！？」

「それにこんながり勉野郎などお断りです！」

ほら見るよ。向こうから反対しているじゃないか。がり勉野郎と言われるのは心外だが、前者の意見には賛成、大賛成。

こっちから願い下げですよ。何をやるかなんて知らないけど。

「ごめん、もうこれは変更効かないんだ。だからこれから彼の事を『総隊長』って呼んであげてよ」

「断る」

「いや、紺ちゃんに言っていないから」

「知らねえし、ちゃん付けするな」

「何で、可愛いのに」

「キモい」

「本当に照れ屋だねえ」

「照れてねえ、むしろ引いてる」

「そ、ん、な、紺ちゃんに……はい、これ。名付けて『ナニナニ？ 我等が親衛隊総隊長』をあげる！」

無理矢理押し付けられたA4サイズの書類の束。いらない。第一、名前がダサい。

「そこには総隊長の仕事内容が書かれているから。つっても仕事なんて、朝と昼の生徒会出迎えと月に一度の総会しかないけど。あとは会長様方を見守るくらい」

「ご丁寧に説明ありがとうございます。読む手間が省けたよ。」

「俺、本当にやんな——」

「任期はたったの二年間。引き受けてくれてありがとうな！ お礼に今日は一緒に寝てあげるよ」

「頭いかれ——」

「てことで、以上！ くれしまこた 呉島瑚太からでした！」

騒然とする中、強制的に壇上から引きずり下ろされ、俺より小さい身体に引つ張られながら講堂を出た。まだ式は終わっていないのに、随分と強引だ。

まあ、言いたい事は山ほどあるし丁度良い。

ついでに一発、いや三発ほど殴らせる。

「この辺なら良いかな……」

講堂から少し離れた場所で掴まれた腕が解かれる。殴ってやろうと拳を固めた俺に、糞チビは焦るわけでもなく「ごめん」と謝った。

「殴ってもいいよ、随分と自分勝手な事をしたからね」

先に言われると逆にやりづらい。先程と雰囲気も違うせいかな、何と

なく殴るのは気が引ける。仕方ないからチョップ一発だけにしておいた。

糞チビは目を見開いたが、すぐに笑顔になる。

「紺ちゃん優しい」

「喧嘩売ってる？」

「売ってないよ。純粹にそう思っただけ」

何なんだこいつ。本当にさっきの人物とは思えない。性格が百八十度違う。

「総隊長の件だけども、本当に悪かったと思ってるよ」

「なら今すぐ取り消せ」

「だからそれは出来ないってば」

無茶言うな、と顔をしかめる。それはこっちの台詞だ。勝手に決めた上に人格を疑われるような嘘を吐いてさ。

お蔭様で今後の学校生活もお先真っ暗だ。

「本当に悪かったと思ってる。でも、僕にはもう時間がないんだ……」

「は？」

「アメリカに行くんだ。こつちには当分戻れなくなって……それで急遽代替わりする事にしたんだ。もう二年間は過ぎたからね」

「はあ……」

それで、だったら何？ 俺よりも適任なんていただろう。何で外部生のうえ初対面の俺に押し付けるんだ。どう考えてもおかしいよ。

「僕はね、嫌われてるんだ。全校生徒、それに先生にも」

「……さっきはそんな風に見えなかったけど？」

むしろ慕われているように見えたぞ。

「僕は紺ちゃんと違って容姿が良いからね。みんな君が総隊長になるのが嫌だったんだろうな。そういう時って、やけに団結力が強いじゃん？」

悪かったな、普通で。

しかし嫌な事に巻き込まれた。

「親衛隊のメンバーはあまり信用出来ない。僕に内緒で色んな事をしていたみたいだし。彼等に任せたら絶対に親衛隊は暴走する。だから外部生の君に任せただ。一般常識のある君にね」

.....

筋は通っている。今だに親衛隊がどのような組織か分からないがそれなりに大きな団体と考えると、あの面食いばかりの惚けた奴等に任せるのは些か不安。

でもさ。嫌われた親衛隊総隊長に任命された俺って、普通に考えるとまさに嫌われる運命じゃないか？

それに加え、俺の株を落とすような紹介。

「あ、うん、ごめん。面白そうだったからさ。それと僕が言うのもアレだけど、嫌われるだろうね。だって僕からの任命、推薦なんだから。まあ慣れれば何ともないさ。二年間、ガンバッテ」

「.....んの、糞チビがあああ!!」

超エリート学校、鼓楼^{くろう}学園。

人目を避けるように、ひっそりと山に建てられたそこはその肩書きとは違い、男達の、男達による、男達の為の、色狂いの学園。

これぞまさに有名無実。

……早く卒業してえ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1442x/>

堪忍袋の緒が切れた

2011年10月19日23時15分発行